

2007.03.01
No.335
(2・3月合併号)

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

建造60年 いまでは造られない木造船 第五福竜丸とともに平和めざす航海を



展示館では二〇〇一年からボランティア・ガイド、職員による説明が来館するほとんど全ての学校の生徒、一般の団体におこなわれている(撮影・飯田邦生)

——わたしたちは、修学旅行に向けて「第五福竜丸」と「世界の子どもたちとユニセフ」について学習してきました。世界には、学校に行けなかったり、水が飲めなかったり、食べ物が十分食べられない子どもたちがいることを知りました。

第五福竜丸の学習を通して被爆について学びました。

これらの学習を通して、私たちはあたりまえに食べ物や水があり、学校へ行けることが幸せなのだと感じました。

核爆弾は絶対に廃絶すべきだと思います——

これは二月半ばに来館した滋賀県竜王中学二年生の「平和宣言」の一部です。生徒たちは、二日間にわたり来館し、一日目は各自で見学しメモをとり、二日目は展示館の学芸員の講演を聞き、平和集会をおこない「平和宣言」を読み上げました。

いつもより早い春の訪れとともに、修学旅行や社会科見学の小中学校が週に一〇校ほど訪れます。

お話をするボランティアからも第五福竜丸の建造六〇年が語られ、生徒も引率の先生方も驚きの声をあげながら船を見上げています。

* * *

いまでは造られることのない大きな木の船。特別展「船大工の技と仕事」、これまでにないテーマを立てて、第五福竜丸六〇年の歴史をたどりながらの企画展示は四月一日より九月二日まで開かれます。

第五福竜丸平和協会主催 3・1ビキニ記念のつどい開かる

ビキニ水爆実験被災53周年の3・1ビキニ記念のつどいは、二月二四日、第五福竜丸展示館に近い夢の島マリーナ会議室にて開かれました。

つどいには六六人が参加、冒頭に主催者を代表して第五福竜丸平和協会の川崎昭一郎会長から「科学者と核廃絶」バグオウツシユ会議50年に想う」と題する特別報告(別掲)がありました。記念講演は鹿児島大学の木村朗さん、一時間一五分のお話と三〇分余の質疑応答がおこなわれ、核兵器問題、戦争が絶えない今日の国際情勢を考えあうつどいとなりました。以下に講演の要旨を掲載します。

講演 核をめぐる危機とチャンスーヒロシマ・ナガサキ・ビキニ 核の惨禍から廃絶へ

木村 朗

「世界」を読み解く視点

私はビキニ事件が起きた一九五四年の小倉生まれです。小倉は、長崎ではなく二番目の原爆投下予定地であったということ。今日のテーマとなっているヒロシマ・ナガサキ・ビキニとも関連するめぐり合わせを感じています。

私は旧ユーゴスラヴィアの政治外交史、とりわけ(旧)

ユーゴと(旧)ソ連の対立をテーマとした国際政治、国際

関係論を専門分野としており、現在は原爆投下問題の見直しをはじめ、「九・一一」(米同時多発テロ事件)以降のアメリカと世界秩序の動きなどを研究テーマとしています。

さて、一見複雑にみえる国際政治も実は単純に見ること



が可能です。今、アメリカはこれまでいわれてきた「抑止するための核」から「使うための核」へと転換し、核を使つた先制攻撃もありうるという危険をつくりだしています。なぜこのような状況なのか、その根本原因をつきとめて、発想の転換が行われるならば危機をチャンスに転換できるのではないのでしょうか。

また、ソ連が崩壊し冷戦が終結したといわれたとき、世界は平和になると考えられました。しかし巨大な軍事同盟機構のNATOは残り、アジアでは日米安保条約が再定義されて存続しています。これらのことは、国際政治の主体を「政府」「国家」というレベルだけで見てもその根本原因はわからないのだと思いま

す。国家の政策に影響力のある組織や集団、勢力の意志との関係を見ていく必要があります。

ヒロシマ前、ナガサキ後

ハンガリーからの亡命物理学者で、マンハッタン計画にも携わったレオ・シラードは、日本の原爆投下をやめさせようと米大統領にはたらきかけた人です。

これが拒否されて実際に日本に原爆が投下されることを知って、これまでに人類にとつての禍いはナチス・ドイツだと考えて原爆開発に協力してきたが、現在もつとも世界にとつて脅威となる存在になりつつあるのはアメリカだ、と訴えました。

そして、「降伏寸前の日本に対して、無警告で原爆攻撃を行えば、アメリカの国際的信用、道徳的地位を失墜させることになる」と批判しました。

さらに「戦後の核の国際管理を通じた核廃絶の実現は不可能になる、ソ連の原爆開発は必ず早まるだろうし、また

れるだろう」と指摘しました。このシラードの「予言」は不幸にも現在の世界に実現してしまいました。冷戦終結後の今日も数万発の核兵器が存在し、「作られた脅威」を前提に不必要な兵器の蓄積と保有が行われているわけですが、これはまったく愚かであると同時に狂気でもあると思います。

原爆の投下は軍事的に不必要なだけでなく道徳的にも許されない非人間的な行為です。アメリカでは、日本の加害問題やパール・ハーバー(奇襲攻撃)とからめて原爆投下を論じたりしますが、原爆のような無差別大量破壊兵器の使用を正当化することは、本来、どのような国家であろうと、どんな状況・理由があろうとも許されない、全否定されるべきものです。

広島・長崎への原爆投下についても、これを避けるための選択肢は、いろいろな時点でありました。しかしボタンの掛け違いが連続しておこつたといえます。

第一に「幻のナチスの核」

(3めんにつづく)

(2めんからつづく)

に怯えて原爆を開発した、という原点。これを否定しない限り核抑止論は克服できません。第二にナチスの核開発断念の情報がもたらされた時点でアメリカも核開発を中止するという選択肢があつたはずです。また、日本の降伏の見通しが明確だった状況で投下する必要はないと判断する第三の選択肢もありました。

ここにアメリカが自らの戦争犯罪を隠蔽するために作り出した「原爆神話」——原爆投下による早期終戦、人命救済——の捏造が見えてきます。

死の商人＝軍産複合体の影

さらにいえば、原爆投下は避けられたのではなく、意図的に、ある特定の目的をもつてなされたともいえるのではないかと考えられます。そのひとつは新型兵器の実戦使用と人体への影響を調査する千載一遇の機会とするとらえかたです。

イギリスのブラケット教授は、「(日本への)原子爆弾の投下は、第二次大戦の最後の軍事行動であつたというより

も、むしろ目下進行しつつあるロシアとの冷たい外交戦争の最初の大作戦の一つであつた」と指摘しています。実際のところ、シラードが予言したようにソ連に原爆開発を急がせ、敢えて「冷戦」を世界的規模で発動することになつていったわけのです。

ここに見えてくるのは、核軍拡競争を引き起こすことを利益とした人々(勢力)の存在があつたのではないかと、ということなのです。

軍需産業、兵器商人などとも呼ばれる軍産(学)複合体「死の商人」の存在に注目すべきです。この軍産(学)複合体の主要企業の代表がマンハッタン計画の暫定会議に参加していたという説もあります。これまでも指摘されているように原爆開発＝マンハッタン計画では、実はなかつたという視点(放射能兵器開発計画とするのが正確)に立つと、核軍拡の悪循環に陥つたほうがかえって都合良かったと考える存在＝勢力があつたことも納得がいきます。

第二次世界大戦後、アメリカが関わつたほとんどの戦

争の背後に「死の商人」が強く影響していたと考えられます。彼ら「死の商人」は、戦争は最大のビジネスチャンスと考えているのです。

対テロ戦争の虚構性

「九・一一」についても 마찬가지です。現在の混沌・混乱を意図的に発動するためになされた事件であつたと考えられるいくつかの証拠が出てきつてきます。そして「対テロ戦争」という思想を立ち上げ、幻の冷戦終結後に、新しい幻の戦争を作り出したのです。

現在、北朝鮮の情勢も危機が去つたかのように一般に言われていますが、実は必ずしもそうではありません。アメリカが軍産複合体の迷惑のまま、無秩序な混沌状況に突き進んでいく選択肢も残されています。もちろん危機を回避し、東アジア共同体のような多国間安全保障を確立することも可能であり重要です。

危機からチャンスへの

転換を!

アメリカはまたNPT体制の機能不全も目論んでいま

す。またアメリカの妨げになるのならば「国連も潰してしまえ」という考えもでてきています。さらには小型戦術核兵器の研究開発を推し進め、通常兵器との一体化も推進しています。これらの現状を見ていくと、国際情勢を悪化させている主要な原因を作り出しているのはアメリカです。

突出した軍事大国であるアメリカは、チョムスキーの言葉を借りるならば、「世界最大のならずもの国家」といえるでしょう。これを支えているのがヨーロッパではイギリスであり、アジアでは残念ながら日本です。

*

このような状況にたいして、大量破壊兵器委員会(ハンス・ブリンクス委員長)は「核兵器を生物・化学兵器とともに国際法上で非合法化するべき」だとする提言を行いましたし、昨年九月には中央アジア非核地帯条約が調印されました。東北アジア非核地帯の追求と実現は、ピースデポの梅林さんが提言するように中国、アメリカ、ロシアの

構想で、非核国への核攻撃の禁止の確約から地域の非核化を作り出していく可能性を持っています。

日本でも「原爆投下を裁く国際民衆法廷・広島」「劣化ウラン兵器禁止を訴える国際大会」が開催されました。また秋葉広島市長、伊藤長崎市長も参加する世界平和市長会議の動きや、中堅国家構想、新アジア構想、非核自治体宣言都市運動、無防備都市宣言運動など、市民レベル、地域レベルでのさまざまな取り組みや提言がおきています。核兵器と国家の間の矛盾を逆手にとつた市民の抵抗を具体的な形にして、新たな展開を作り出すことは可能なのです。

情報操作への

カウンターパンチ

核軍拡の歴史と「九・一一」を研究していると、共通の問題点として実感するのは、政府や権力と一体化したメディアによる情報操作、(都合な)事実の歪曲や捏造です。そして事実と正反対の「都合

(5めん下につづく)

記念のつどい特別報告

科学者と核廃絶〜パグウオツシユ
会議50年に想う

川崎昭一郎

原爆や水爆のことを第一原理から理解できるので核の問題についての物理学者の発言は際立っています。

広島に原爆が投下される二カ月前六月二日に、ジェームズ・フランク委員会の報告書が米国防長官あてに送られました。「アメリカが人類無差別破壊のこの新しい手段を最初に用いるならば、世界の人びとの支持を失い、軍備競争を促進し、このような兵器を将来規制する国際協定に達する可能性を阻害することにな



ろう」と指摘しています。

四つの反核の金字塔

フランスのフレデリック・ジョリオ・キュリーは亡くなる少し前に、特に重要なものとして次の四項目を挙げています。

- 1 原子兵器に反対する最初の「世界平和運動」による意思表示（一九四九年四月）
- 2 一九五五年八月原水爆禁止世界大会の開催
- 3 多くの個人、諸組織による核兵器実験中止と核兵器禁止の意思表示―政府首脳、各国議会、ローマ法王の一九五五年クリスマスメッセージ、アルバート・アインシュタイン、など
- 4 広島・長崎原爆からの放射線の影響、及び核爆発実験による大気・土壌の放射能汚染の解明への日本の科学者の貢献

重要な年、一九五七年

五〇年前の一九五七年は科学者の発言と行動が盛り上がった年でした。

四月一二日に西ドイツの科学者一八名がゲッティンゲン宣言を発表、戦略核と戦術核の区別は人為的でいづれも広島並みの被害をもたらすと指摘、自分たちは原子兵器の生産、実験、使用には、いかなる仕方でも参加しないと明言。

四月二三日にアルベルト・シュヴァイツァー博士がノルウェー・ラジョで、継続する核兵器実験の影響に注意を喚起。

六月にアメリカのライナス・ポーリング博士が米科学者二千名以上による核爆発実験中止を求める警告を発表。翌一九五八年末までに他国の科学者九千名が署名に加わります。

そのほか、東ヨーロッパ統一国際原子核研究所の科学者たちは核兵器実験・核兵器禁止を呼びかけ、フランスではサクレの原子核研究センターの一一七二名の科学者が自国政府に対して核兵器実験

中止のイニシアティブを取るよう求めています。

これらの動きからも、ビキニ事件以降は、科学者の主要な関心・心配が大気中の核爆発実験と放射線の影響であったことが分かります。

パグウオツシユ会議めざし

一九五五年七月にラッセル・アインシュタイン宣言が発表されますが、この宣言で大事な点は「科学者の国際会議」というアクションを取ること、を提起したことです。

バートランド・ラッセルのイニシアティブで準備が進められました。その詳細はラッセルの自叙伝や往復書簡に記されています。

物理学者だけでなく、放射線の影響を論ずるため生物学や遺伝学分野の科学者にもアプローチしました。

この国際会議は当初、西側と東側の科学者を一堂に集めるためインドのニューデリーでの開催が構想されました。

しかし、一九五六年一〇月のハンガリー事件や英・仏・イスラエルのエジプト侵攻、それに先立つスエズ運河封鎖

などでヨーロッパからインドへの旅行が遠回りになることもあり、変更されます。

早くからこの会議のスポンサーとなることを申し出ていたカナダの実業家サイラス・イートンの生地パグウオツシユで一九五七年七月八―十一日に開催されます。

一〇カ国（オーストラリア、オーストリア、カナダ、中国、フランス、日本、ポーランド、ソ連、英国、米国）から二二名の科学者が参加しました。

会議の結論

会議の議題は、原子エネルギーの使用から生ずる危険、核兵器の管理、科学者の社会的責任の三つで、大規模な核爆発実験のもたらす影響について定量的な評価を行い、東西の科学者が初めて合意に達しました。これ以上の核爆発実験の継続を非難することで一致しました。

これが一九五八年のソ連の一方的核兵器実験中止、一九六三年の米英ソ部分的核実験停止条約へとつながります。（第五福竜丸平和協会会長、千葉大学名誉教授）



一九四七年の教育基本法の制定に深くかかわった、戦後の初代東大総長南原繁（一八八九〜一九七四）の遺した言葉に、「真理立国」がある。「万邦無比」（世界に較べるもののない）「国体」（天皇を中心とした国家体制）が強調され、その国体の前には、人びとの学びたい、考えたいという欲求は窒息させられ、ものごとの本質をみきわめるといふ真理探究の精神がない

新刊『フィールドワーク 第五福竜丸展示館』 （第五福竜丸平和協会編）を読んで

川口重雄

がしろにされた時代を経験した南原の痛切な言葉である。「美しい国へ」などと、夜郎自大な自らの歴史観を臆面もなく披瀝する政治家が登場するなかで、昨年来この言葉が脳裏に浮かんだ。

本書は、ものごとの本質をみきわめたいと考える人の、絶好の手がかりが身近な場所にあることを教えてくれる。

第五福竜丸の元乗組員・大石又七さんを「案内人」に、プロローグ「大石又七さんは語る」、第一章第五福竜丸展示館に行こう、第二章一九五四年三月一日―ビキニ水爆実験と第五福竜丸、第三章マーシャル諸島の核被害、第四章核兵器のない世界をめざして―第五福竜丸と平和への航海を、という四章で構成され、それぞれの章から読んでも、またどの章だけを読んでも、ビキニ事件とは何だったのか、何であり続けているのかということを、私たち読者に問いかけてくる。

第五福竜丸への 格好の手引き書

もしもあなたが、本書を

持って新木場駅に降りたとして、埃っぽい湾岸道路（国道357号）を渡って明治通園入り口のゆうかり橋からしばらく歩くと茶錆色の屋根の第五福竜丸展示館が見えてくる。

大漁旗に迎えられて館内に入れば、死の灰の入った瓶や一九五四年三月一日でめくられることなくつたカレンダー。それらをこわごわと眺めるカップルや親子連れ、時には小学生や中学生、折り鶴を携えたグループもいる。「これに私も署名したんだよ」と懐かしそうに話すおじいさんの話に、ビックリして聞き入る孫の顔もある。ふつうの人が、心からの怒りをペンに込めて集まった約三三〇〇万の署名簿。それは史上初の日本から始まった平和運動―第一回原水爆禁止世界大会（一九五五年）へと発展した。そうだ、私たち一人ひとりの力も捨てたもんじゃない、と。館内の展示を見終わって外に出れば、「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という、無線長久保山愛吉さ

（3めんからつづく）
のいい神話」が創出されていきます。

これらに対抗するためにはメディアリテラシー（情報を読み解く力）が必要となります。

以前、伊丹万作氏（脚本家、映画監督）が敗戦後に書いた「だまされる者の責任」を読みました。だまされたから責任がないということにはならない。だまされる側の責任こそが問われなくてはならない。知らなかった、やむをえなかったというのは、みずからの責任をまっとうしようとする姿勢を放棄したことにな、というものです。

今、地域から市民が主体となって平和を作り出していくという発想が重要です。そして横のネットワークをひろげていくことが大切だと思います。さらに権力から独立した、市民による独立メディアの形成が急務だといえます。すでにその芽生えはありますが、ネットなどで市民発信のメディアが成長することで、軍産（学）複合体と情報操作とに対抗していくことができると思うのです。

（きむらあきら／鹿児島大学文学部教授・長崎平和研究所客員研究員、平和学・国際関係論専攻）

*

んの石碑、福竜丸のエンジン、マグロ塚。いつの間にか、二〇世紀半ばの歴史を旅してきたことに気付くだろう。そして、物言わぬ福竜丸が発信しているメッセージを反芻しながら私たちは帰途につく、確かな重みを感じながら。

（田園調布学園中学・高等学校教諭／丸山真男手帖の会代表）

『フィールドワーク第五福竜丸展示館』川崎昭一郎監修、第五福竜丸平和協会編、平和文化刊。A五版六四ページ、写真、展示館案内図など図版、用語説明・コラムなど。頒価六三〇円（税込み）。書店での取り寄せ可。展示館でも扱います（展示館・送料込み七〇〇円）。



一月二一日―二二日、ボランティアの会は、研修旅行を行いました。会の世話人、遠藤昌樹さんがレポートします。

ボランティアの会 放射線を学び考える 研修の旅

遠藤昌樹

原子力のまち東海村へ

「核兵器の恐ろしさ」「放射線の怖さ」を子どもたちに説いている私たちは、日常の、身の回りの放射線のことを調べてみよう、またビキニ事件と日本の原子力発電所の導入と深いつながりがあることから、今年度の研修旅行は東海村の原子力関連施設やJCOの臨界事故の現場を見学しようということになりました。

毎回研修後の宿泊先では、見学の成果を今後の展示館の活動にどう生かすかなど議論百出で意義深いものですが、今回は往きの列車の中でも学習会をおこなう熱心さでした。

東海村では、原子力研究所 研究員OBの出井義男さんと青柳長紀さんが家用車で案内してくださいました。見学先のコーデインイトから当日の資料の手配まで、細やかに心配りしていただき、本当にお世話になりました。

残念ながら原子力発電所の中の見学は許可されませんでした。「テロ」に警戒する国

も、ここでまた日本の原子力発電所の実態が秘密のベールに覆われ、いつしか重大事態に繋がらなければいいがと心配になりました。しかも研修直後には東京電力の原子力発電所での事故隠しが発覚。また、「ふげん」の建屋の耐震強度が基準の半分以下ということが報道されました。秘密のベールの中はどのような

ウラン 臨界事故の現場で

一九九九年に日本最大の原子力事故をおこしたJCOの門の前に立ったとき、すぐ目前に事故の発生現場があり、中性子線を一九時間放出し続け二人の命が奪われた転換棟のあった建屋、従業員達が避難集合した運動場など、静かな風景の中に生々しく感じられました。

発生現場の建屋に間近い西側の道路脇に人家があり、放射線を扱う現場との近さに驚きを覚えました。地図で確認すると東海村には放射線を扱うところがいくつもあるのです。そしてその現場が、JCOのように無神経に活動し

ているとしたら、ひいては政府の原子力行政が無神経な管理運営を許しているとしたら・・・。私たちの身の回りは大丈夫なのかと疑われ

豪華な施設にて

つづいて原子力研究所の付属施設「原子力科学館」を見学。世界最大という「霧箱(クラウドチェンバー)」で三〇センチも光る自然放射線の軌跡を見て放射線を実感しまし

た。また企画展の「放射線利用展」では、こんなにさまざまな分野で使われているのかと感心すると同時にやはり大丈夫なのかと思ってしまう

日本原子力発電(株)の「東海テラパーク」、原子力機構の展示館「アトムワールド」では、ガイドをして下さる若き女性のうっとり流れるような説明に、原子力発電所のこの上ない有用性と安全性を考えてしまいます。事故や事故隠しのことにはもちろん触れられませんが、この方自身はどう感じているのか

また、原発の経済性についての説明が印象に残りました。埋蔵量を比較しながら化石燃料はウランに比べ、うんと少ない時間で枯渇すること、原子力発電の方が安いことが強調されていました。埋蔵量は絶対的なものではないし、価格も戦争や国際政治の駆け引きの中で上がったりがつたりするのだから経済性は絶対的なものではないのになあと思いました。

やはり現地へ行って目で見る、その場で肌で感じることで多くのものを学ぶことが出来ました。展示館の留守番役に回って下さった方に感謝しつつ・・・。あらためて出井さん青柳さんに感謝申し上げます。

お花見平和のつどい

2007年4月7日(出)11:00~15:00

第五福竜丸展示館前広場

- ◆第五福竜丸船体とエンジンのいま
- ◆被爆者集団訴訟、憲法など

※第五福竜丸から平和を発信する連絡会

ベン・シャーンの『ラッキードラゴン』と向き合う

荒木 康子



亡くなった漁師・久保山愛吉を描いた『ラッキードラゴン』
(2145x122cm)
福島県立美術館蔵

私がアメリカの画家ベン・シャーン（一九八〇—一九六九）に出会ったのは、福島県立美術館に学芸員として勤務するようになってからだ。以前から名前は知っていたし、作品も見ていたはずな

シャーンの企画展にとりくんで

のだが、正直なところ、脳裏に鮮明に焼き付く画家ではなかった。勤めるようになってはじめて、重要な収蔵作家の一人として、ベン・シャーンのことをきちんと知ったといつてよい。それにしても展示室で眺める『ラッキードラゴン』*は、いつも不気味で近寄りたくない存在だったのは確かである。

ある年、私にベン・シャーンの小企画を担当せよという話が来た。私は、国内で集められるグラフィックアートの作品を紹介し、社会派の画家として知られるシャーン

別の側面にアプローチしようと考えた。その時の私には、『ラッキードラゴン』というテーマはまだ重すぎたのである。ポスターやブックデザインの仕事の他にレコードジャケットなども探してきて展示した。楽しい仕事だった。予算はなかったが、自分のやりたいことができたからかもしれない。そして、グラフィックデザイナーとしての力量、シャーン独特の線の魅力、私自身、あらためて認識することとなったのである。しかしそれだけではなかった。

この時、私は出品作品一つ一つに解説をつけた。作品が描かれた背景を知れば知るほど、どの作品にもそれが描かれる必然性があり、しかもそれらの根底には、シャーンのゆるぎない確信ともいえるべきものが、太い一本の幹のように貫かれているように思われてきたのである。どこか最も根源的な場所につながる何かがあるような気がした。

第五福竜丸を描いた

シャーン作品

やがて私は『ラッキードラ

ゴン』のシリーズについて、もっと知りたいと思うようになった。それが、ベン・シャーンと私の本当の意味での出会いといえるかもしれない。この画家の確信ともいえるべきもののより鮮明な形を見たいと思っているが、そう簡単にはいかない。その輪郭は、いまだおぼろである。

昨年秋に詩人でエッセイストのアーサー・ビナードさんが、ベン・シャーンの第五福竜丸事件に関連するイラストや絵に言葉を添えた『ここが家だベン・シャーンのラッキードラゴン』（集英社）という絵本を出版された。この本は、ビナードさんとシャーンのダイアログの軌跡といえるだろう。シャーンとの内なる対話の中から紡ぎ出された言葉のかずかずが、画家の描く線と見事に競演している。「ひとびとはわかってきたービキニの海も日本の海もアメリカの海もぜんぶつながっていること。」海の深いところですべてが交わり、それぞれのエゴはかき消される。最後のページに載せられた海の絵には、そうしたビ

ナードさんとシャーンの強い願いと深い想いが重ねられているのではないだろうか。作品論とは違った方法で、作品を語る言葉の一つのあり方であらう。

シャーン晩年のこの作品群について、言葉は十分に尽くされているとはまだ言い難い。もつといろいろな側面から語られていいはずである。それだけの懐の深さを十分に備えた作品なのだと、今では思う。私もシャーンの懐に潜り込んで、もう少し格闘を続けてみたいと考えている。

*『ラッキードラゴン』（一九六〇年、綿布・テンペラ）は、第五福竜丸事件を題材にしてベン・シャーンが描いたタブロー一点のうちの一点。福島県立美術館蔵。なお、シャーンは第五福竜丸についてタブローと素描など約五〇点の作品を残している。（あらかやすこ／福島県立美術館学芸員）

来館者の感想から

◇原水爆の恐ろしさをあらためて感じました。慰謝料で片付けるような問題ではないと思います。世界の平和のために今自分に何ができるのかと考えさせられました。(神奈川・21歳女)

◇ぼくたちの知らない戦争があることをここで知りました。(東京・14歳男)

◇やっと訪ねることができました。当時岐阜の中学生で、新聞を見て母と何時間も語り合いました。その母に一度この展示館の第五福竜丸を見せてやりたかった。(三重・69歳女)

◇きのう川崎で平和の集いがあり、俳優の伊藤巴子さんが第五福竜丸のお話を読んでくださいました。感銘を受けて今日見学に来ました。いま息子は5歳でまだよくわからないようですが、もっと大きくなったら再度来てみようと思います。(神奈川・39歳女)

◇東京マラソン参加がなかった機会にぜひ見学したいと完走後、ちょっと重い足を引きずってやってきました。歴史の証言として現物がいつまでも保存され活用されることを願います。(宮城・60歳男)

保育園でも 「ふくりゅうまる」の話

兵庫県尼崎市の太陽の子保育園の保育士さんが2月中旬に来館し、園児たちが一生懸命に折った折鶴をいただきました。

園では紙芝居『トビウオのぼうやがびょうきです』やピースアニメ『つるののって』を何度も見て「漁師のおじちゃんかびょうきになったら、悲しいなあ」「おとうちゃんが原爆で死んだらいやなあ」と話し合ったそうです。

いま第五福竜丸をテーマにした劇も創作中とのこと。楽しみです。

日本山妙法寺の 平和行脚スタート

3・1ビキニデーにむけて日本山妙法寺(日蓮宗)がすすめる平和行脚が第五福竜丸展示館から出発しました。一行30名は2月13日、展示館に集まり、建造60年の船と館内を見学、久保山碑に核兵器廃絶、不殺生・非暴力、憲法9条を守り広めることを誓い焼津にむけて出発しました。

一行は3月1日に焼津市に到着、浜当目・弘徳院の故久保山愛吉氏の墓前に詣でます。

3・1ビキニ記念のつどい 参加者のアンケートから

「このままつき進めば必ず第三次世界大戦が起こり核兵器が使われ人類が滅亡するような時がくることを実感しました。危機感を持って反核をいい続けたいと思います」(50代)

「大きな視点でさまざまなことがハッキリ見えてきました。どんな行動をおこしたらよいか、一市民として知りたいと思います」(60代)

「複雑に見えるが本質は単純。そして背景に何があるのかがよくわかりました」(50代)

「9・11、第五福竜丸のことなど知らないことばかりで胸のふるえる思いで聴きました。今こそ声をあげなければと決意しております」(80代)

協会役員・評議員懇談会 ひらく

第五福竜丸平和協会は、2月24日の3・1ビキニ記念のつどいに先立つ午前11時より夢の島マリーナ会議室にて理事・監事・評議員による懇談会を開きました。今年度は、理事・評議員の改選期にあたること、公益法人の

制度改革の法律が2007年秋ごろに施行されることをうけて、現況報告と意見交換をおこないました。

会には、川崎会長、藤田副会長以下理事5名、監事2名、評議員5名が出席しました。意見交換は、船体60年の記念特別展の構想や行事などについてもかわされ、船体保存のための対策委員会の設置や寄付活動の検討などもだされました。

展示館に車イス配置、トイレ 改修で一新

*展示館を訪れる高齢者や身障者のための車イスの設置の必要性が以前よりいわれておりましたが、このほど車椅子を協会で購入し、希望者には館内で利用いただけるようになりました。

車椅子利用のインフォメーションも掲示されました。

*1月初めよりおこなわれていた展示館内のトイレの改修工事が終了し3月1日より使用できます。

トイレの改修は数年前より東京都に要請してきました。今回の改修は内部を全面的におおして男女トイレが分けられ、車椅子対応の「だれでもトイレ」もまったく新しくなりました。手洗い設備や乾燥機も設置されました。



お知らせ

*お詫びと訂正 1月号3面4段目、第五福竜丸の前身、第七事代丸の船主の名前に誤りがありました。正しくは寺本正市氏です。

*「福竜丸だより」今号は2・3月合併号です。次号は建造60年企画展のための特別号として4月初旬に4・5月合併号として発行します。